

2020 年 11 月 11 日 (水)

『大陸横断世界旅行』ダイジェスト版

卓話者 松野 秀計 会員

旅行期間 1988 年 7 月 6 日～1988 年 12 月 20 日 (168 日間)

渡航国 中国、モンゴル、ロシア、ウクライナ、ハンガリー、チェコ、スロバキア、オーストリア、イタリア、パチカンシティ、ギリシャ、セルビアモンテネグロ、ボスニアヘルツェゴビナ、クロアチア、スロベニア、ユーゴスラビア、リヒテンシュタイン、スイス、ドイツ、オランダ、ベルギー、ルクセンブルグ、モナコ、フランス、スペイン、ポルトガル、イギリス、モロッコ、トルコ、イラン、シリア、エジプト。計 32 カ国

旅の資金 80 万円。

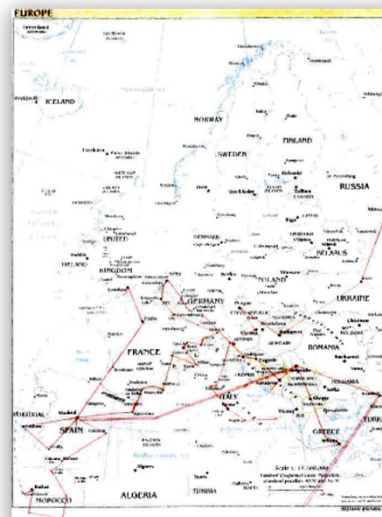
資金調達は、当時北京留学中、日本で中国が開発した育毛薬「101」が爆発的なブームになり、友人と 250 本を仕入れ日本へ輸出。1 週間で 250 万円を稼ぎ、それを旅の資金とする。

2 年間の中国遊学を終え、ゴール地点をトルコのパムッカレと決めて旅の計画を立てる。シベリア鉄道の格安チケットがブラックマーケットにて北京発モンゴル、モスクワ、キエフ経由ハンガリーのブダペストまでの片道チケットが 120 ドル (15,600 円) を購入。



<1 日目>

2 週間のシルクロードの旅から北京に戻り、いざシベリア鉄道に。これからモンゴル経由の 5 泊 6 日のシベリア鉄道の旅がスタートする。今回の旅行は所持金 80 万円がなくなるまで旅をする予定だが、はたしてどこまで周れるだろうか。トルコのパムッカレまでは行きたい。あわよくばヨーロッパ～中近東～インド～チベットを抜けて中国に戻りたい。



EUROPE



ASIA

<3 日目>

モンゴルとソ連の国境に到着。機関銃を持った兵士が 3 人乗り込み車内をくまなくチェックする。中国の人民解放軍と違いソ連の兵士は迫力満点だ。列車を降り、国境

の駅でソ連への入国審査。ここでとんでもないトラブルが発生した。私のパスポートには、高校生で体重が 122 キロある時の写真が張ってあり、2 年間の中国留学で体重が 50 キロ痩せてしまっている今は、まるで別人のようになっている。そのため偽造パスポートの疑いで、別室に拘束されてしまった。3 時間後、無事開放。このため、シベリア鉄道を 2 時間も遅らせてしまった。

<11 日目>

ハンガリーのブダペストに到着。社会の教科書や TV で見たヨーロッパ風景や建物が目の前に飛び込んできてとても感動した。ドナウ川のほとりに建つ王宮や議事堂は中世の建物でタイムスリップしたかに思える。音楽の授業で「青き美しきドナウの・・・」という曲を聴いた覚えがあるが、実際のドナウ川は全然青くなく、むしろ茶色に濁っていた。

<25日目>

フィレンツェから列車とバスでピサの斜塔を見に行く。本当に根元から曲がっていて、今にも倒れそうだ。塔は6階建てで真ん中は吹き抜けになっている。らせん状の階段を昇り屋上まで行くが、上に行けば行くほど傾斜がきつく、とても立ってられない。更に手すりは錆付いた鉄の手すりですべて危険だ。絶対に年に何人かは落ちていると思う。

<28日目>

今日はイタリアの洗礼を存分に浴びることになった。ローマ駅からコロッセオまで歩いて行くと、途中で子どもジプシーに囲まれる。「ジプシーには気をつけろ」と聞かされていたので警戒はしていたが、子どもだったので安心していたら、リュックサックをナイフで切られウオークマンを取られてしまった。ジプシーの窃盗集団は子どもがメインらしい。また銀行で日本円を3万円分イタリアリラに交換した。本来30万リラになるはずが、何度数えても3万リラしか無く、窓口のお姉ちゃんにクレームを言うと、とぼけた感じで間違えを認め、27万リラを渡された。日本人だから気づかないだろうと、絶対に故意的にやったと思う。イタリアは油断も隙もない国だ。

<35日目>

イタリア半島の踵の部分ところにあるブリンディッシという港町から、ギリシャのパトラスという町まで船で移動する。夕方出航し朝にはギリシャに到着する。中国から数えて9カ国目。船から見るイタリアの茶色の大地と白い建物に緑色の窓、真っ青に澄んだ地中海とのコントラストは日本や中国では見ることができないとても綺麗な景色である。一番安いチケットのため部屋は無く、甲板に寝袋で寝ることになった。寝相が悪いと寝ている間に海に転げ落ちてしまいそうでちょっと怖い。

<42日目>

ユーゴスラビアのドブロブニクという昔の古城がある港町に到着。アドリア海に面したこの街は中世のヨーロッパの町並みがそのまま残っていてとても素敵なおとこだ。もっとすごいのはこのあたりのビーチはすべてヌーディストビーチであることだ！街で日本人と知り合い総勢5人でボートに乗り小島に渡る。目の前には素っ裸のパラダイスが広がっていた！

<51日目>

朝早くドイツのケルンに着いた。ドイツで12カ国目となる。まだ6時なので銀行が開いてなく、9時まで時間をつぶすことにする。駅から外に出てみると朝もやの中に巨大な建物がそびえ立っている。これが有名なケルンの大聖堂だ。第2次世界大戦の時も世界的な遺産ということで、一切空襲を受けていないらしい。大聖堂の塔の最先端まで昇れるということなので、早速行って登ってみた。500段以上のらせん階段がぐるぐる。昇ること15分、最上段に着く頃には目が回ってしまった。しかし最上階からみるケルンの町の景色は絶景だ。街の真ん中にライン川が流れている。大聖堂より高い建物はなくケルンの町が一望できる。ヨーロッパに来ていろんな高い建物に登ったが、この大聖堂が一番高いのではないだろうか。まだパリのエッフェル塔があるので楽しみだ。

<58日目>

昼前にオランダのアムステルダムに到着。ケルンから降っている雨が今日もまだ続いている。これで1週間ずっと雨続きだ。オランダというとチューリップとひまわり、風車のイメージが強く、とても綺麗な町を想像していたが、まるで正反対だ。駅前の広場には怖そうな若者がたむろし、いたるところに犬の糞がころがっている。オランダではマリファナは合法で、町のバーで普通に手に入るらしい。更に驚くのは「飾り窓」という男にとってはパラダイスな場所がある。赤いランプが立ち並び、ショーウィンドウのようにガラス張りになっている店をのぞいてみると綺麗なお姉さまたちがパンツ姿で・・・ワンショット5,000円。黒人ストリートや白人ストリート、デブ専用ストリートまであった。

<71日目>

ミュンヘンに向かう。ドイツの各地ではこの時期オクトーバーフェスティバル（ビール祭り）をやっている。一番大規模なのがミュンヘンのビール祭りだそうだ。ミュンヘン駅はビール祭りに来た人たちでごった返し、人で人であふれかえっていた。祭りの期間中はミュンヘン中の宿泊施設はすべて満杯のため今日から3日間は野宿生活が確定した。駅には同じ境遇の人がたくさんいて、野宿するスペースを確保するのに大変そうだ。隣に寝ていた香港人に声をかけ一緒に行動することにする。まずはダンボールを拾ってきて今晚の宿泊スぺー

スを確保してから、二人でビール祭りにでかけた。会場は巨大な倉庫のようなテントが何棟も張られ、中には2～300 人の人が巨大なジョッキを片手にビールを持ち、生バンドの演奏にあわせ、踊ったり、歌ったり、陽気に騒いでいる。テントの外は移動式遊園地や、大道芸、コンサート会場等々があり、まるでディズニーランドのようだ。しかし普通のイベント会場と大きく違うのは、会場にいる殆どの人が酔っ払っていることだ。会場に入りビールを飲んでいると、隣のドイツ人が声をかけてきた。「お前は日本人か？戦争を今度やる時は、イタリアを抜きでやろうぜ！」といって握手を求めてきた。きっと第二次世界大戦のことを言っているのだろう。

<100 日目>

朝、バルセロナからマドリードに到着した。列車から降りようとしたとき、急に車掌に呼び止められた。ちょっと来いという素振りだったので、付いて行くと隣の車両に、睡眠薬を飲まされ、鞆や洋服すべてを盗られ、これぞ「身ぐるみをはがされる」という言葉がぴったりの状況になっている日本人旅行者が寝ていた。まだ、睡眠薬のせいで意識がもうろうとしているため、服を着せ医務室に連れて行くことになった。1時間ほどしてまともに話せるようになったので、事情を聞くと隣に座った人から未開封のジュースを貰い、それを飲んだ後、急激に睡魔に襲われたようだ。パスポートも盗られてしまっているの、まずは日本大使館を探して訪ねてみると、似たような被害に遭った日本人がたくさん窓口に並んでいた。明日はわが身。気をつけて旅行しないと。

<105 日目>

マドリードから列車で2時間ほどのところに「セコビア」という昔ながらの古い町がある。小高い丘の上に街ができていて、周りは川と一面に広がる農地のため、映画や絵画で見ると中世の街がそのまま残っているような錯覚をおぼえる。街の所々にはローマ時代の水道橋が今もそのままの状態に残っている。本当にタイムスリップしたような感じである。丘の上には中世のお城が建っている。地元の人が言うには、このお城がディズニーランドのシンデレラ城のモデルになった城であると力強く言っていた。ドイツの「フッセン」にあるノイシュバンシュタイン城がモデルとしては有名であるが、両方見てみるとセコビアのお城のほうがそれらしい雰囲気があるのではないかなと思われる。「トレド」、「セコビア」といった大都市近郊にあり、ひっそりたたずむ中世の街を訪れるのはスペイン旅行の醍醐味である。次はドンキホーテの風車を見に行こう！

<110 日目>

パリに到着した。有名な都市はどこへ行ってもホテル代も食事代も高い。同じヨーロッパなのにアルプス山脈の北側と南側では、物価も環境も人間性もぜんぜん違うのは不思議である。気温や天候が人間の性格や文化に大きな影響をおよぼしていることが非常によくわかる。マドリードで仕入れた情報を基に、ソルボンヌ大学周辺で安宿を探すことにした。さすが貧乏旅行者の生の情報！1泊千円以下の安宿を確保することができた。昼食はソルボンヌ大学の学食に行ってみることに。値打ちでたくさんの食事がありつけ、さらにまわりは金髪の可愛い女子大生ばかり。ランチの美味しさが格段に増す！

<119 日目>

夜の22時、「レ・ミゼラブル」を見終わり、感動の中ユースホステルへ帰った。自分のベッドルーム行くとそこには見知らぬ黒人が寝ているではないか！その外国人に「ここは俺のベッドだ。移動してくれ」と言っても言葉が通じず、全然ちがいが開かないのでフロントにクレームを言いに行くと、「お前はもう4日過ぎてからここには泊まるができない」と言われた。イギリスのユースホステルのルールは同じホテルには最長3泊4日までしか泊まるができないらしい。「どうしてもっと早く教えてくれないのか」と怒ったが、「お前がいなかったから」と……。確かにミュージカルの当日券を買うために朝6時前にホテルを出て、その後は大英博物館、夜はミュージカル。朝からいままで一度もホテルに戻っていなかった。当然ホテルは満室で空いてるベッドはない。更に12時には門限となり、部外者はホテルから出て行かなければならない。11月過ぎのイギリスは半端に寒く寒い。零下5度以下である。12時ぎりぎりまでホテルで粘り、荷物を背負って極寒の街へ出た。30分程経つと体が冷え込んできたので公園の遊歩道をひたすら歩くことに。1時間ほど歩くと体が温まり、汗が出てきた。しかしこれが命取りになる。しばらくすると汗が冷え一段と体は寒くなる。体力も消耗しお腹も減る。こういうときは、やはりじっとしているのが一番である。風の通らない建物の影で、拾ってきたダンボールを床に敷き、新聞紙を体に巻き、持っている服すべてを重ね着をし、寝袋に入り朝まで耐えることに。絶対に明日にはイギリスを脱出するぞ！

<124 日目>

中森明菜の歌にも出てきたマラケシュ到着。中央広場にはいかにもアフリカらしく無造作に店が並び、いろんな商品が売られていた。金や銀の製品や、じゅうたん、香辛料、バザールにはお決まりの蛇使いの人も……。TV番組「なるほどザ・ワールド」で見た光景そのものが目の前に広がっている。

<137 日目>

イスタンブールは今日で 5 日目。今日は日曜日なのでブルーモスクの礼拝を見た後、トプカピガレージのサンデーバザールへ行ってみる。屋台の床屋で髪をバツサリ切り、僻地への旅行へ向けての準備を進める。アフリカから来たのでトルコの寒さはこたえる。バザーでところどころ破れた革ジャンを 150 円で購入した。港では水揚げされたばかりのサバをフライにしパンに挟んで販売している。とれとれのフィッシュバーガーが 1 人前 100 円。ものすごくうまい！

<141 日目>

長距離バスでトルコの南西部にあるパムッカレへ向かう。パムッカレはこの旅行の最終目的地である。ここも「なるほど・ザ・ワールド」で取り上げられ、子どものころから絶対行ってみたいところベスト 3 のひとつである。ちなみに当時行きたかったベスト 3 は、1 位「南米のガラパゴス諸島」、2 位「トルコのパムッカレ」、3 位「イタリアローマのトレヴィの泉」パムッカレは想像通りの素晴らしい景色で、真っ白で段々畑のようになった石灰石の丘に頂上から温泉が流れだし、湯気がたっている。夕陽とのコントラストはとても感動的だ。

<147 日目>

イランの首都テヘランに着く。まずは闇市へ行き、隠して持ち込んだ米ドルを交換する。換金レートは 20 倍に上がっていた。300 ドル（1 ドル＝133 円）を交換。4 万円がいきなり 80 万円に早変わり！早速、町の中心にある高級ホテル「インターコンチネンタルホテル」にチェックイン。夜はフランス料理、キャビアも食べ放題。長きにわたる貧乏旅行で押さえつけられていた欲求がここで一気に爆発した。

<157 日目>

まだ暗がりの中ピラミッドへ向かう。警備がない朝方のすきを狙い、ピラミッド登頂に挑戦。ひとつの石が 1 m 以上あるので、登るのはとても大変だ。20 段くらい登ったところで日の出となった。幻想的な雰囲気かともいいきや、すぐ近くには小汚い町が隣接しているので、思い描いたピラミッドとは全然違っていた。世界各国歩いてきたが、実物より写真のほうがよいのはピラミッドくらいのものだ。日の出から 5 分もしないうちに警備員に見つかり警笛が鳴り響き、3 人の警備員に囲まれる。観光客も増えてきて大ごとになりそうだったので、登るのを途中であきらめ降りることにした。当然のことながら、警備室に連れて行かれこっぴどく叱られた。事前情報で裏金を握らせれば収まるらしいと聞いていたので、警備員のリーダーに 20 リラ（1,000 円）残りの 2 人に 10 リラ（500 円）ずつ渡したら無罪放免となった。

<164 日目>

アスワン駅の広場から朝 5 時出発でアブシンベルへ向かう。8 人乗りのワンボックス車には日本人、ドイツ人、スイス人、イギリス人で構成されていた。ヨーロッパの人たちはこの時期、避寒を兼ねてエジプトを旅行している。砂漠の中を走る事 2 時間、地平線から朝日が昇ってきた。黒い大地が赤に変わり、白い大地へと変わっていく姿がとても幻想的である。しばらく走ると、ラクダの大群に出くわす。有に 100 頭を超えるラクダはラクダ商人が何日もかけてスーダンからエジプトへラクダを売りに連れてきているとのことだ。悪路をひた走り 4 時間。アブシンベル宮殿へ到着。真っ青に晴れ渡った空の中、真っ青に広がったナセル湖のほとりを登っていくと、目の前には 4 体の巨大な像が飛び込んでくる。まさに感動！見る者すべてを圧倒するこのスケールの大きい宮殿は 5 ヶ月を超す旅行のフィナーレにふさわしい。1 時間の観光後、また 4 時間かけてアスワンへと戻る。帰り道アスワンハイダムと水の中に浮かぶヌビア神神殿、イシス神殿を見学したがどこに行ってもエジプトは感動の連続だ。

「大陸横断世界旅行記」ダイジェスト版をこれにて終了させていただきます。
（5 ページ、6 ページに写真を掲載しております）

